

活字に飢えた戦時下の青春

小林光子

現在のように、新刊書が書店に次々と並び、街に雑誌の氾濫している時代に、“私達の青春時代は活字に飢えていた”と言っても、若い人々に本当に理解されることは難しいであろう。“コンピュータや携帯に時間をかけ過ぎなのよ”と片付けられそうだ。

第二次世界大戦下の六十余年前、紙資源不足・人手不足で本の出版は殆んど無かった。新聞までが正しい情報が書けず、軍部の方針に従ったニュースを書き流した。疎開、空襲、取り壊しで書店が消え、我々女学生も三年生から造幣省、兵器工場にと動員され、学校生活から遠ざけられた。

十五歳前後の一番勉強の面白さ、楽しさがわかりだした時に、突然学業を中断させられ残念ではあったが、日本が正義の戦いに勝つために、各人ができる限りの力を尽くすことは国民として当然と信じ、戦争に何の疑いも持たなかった。幼い頃からの教育の力とは、本当にすごいものだ。

勿論、食の飢えも当然あった。都会育ちの私の家では食料が乏しく、“お雑炊”の日が多かったが、食べたい盛りの年齢を少し超えていたせいいか何とか我慢できた。貴金属類はすでに献納して無かったので、母は伝を頼って農家を紹介してもらい、着物と食料を交換していた。が、ごく少量の食べ物しかもらえず、四人の育ち盛りの子供を支えるのはさぞ大変なことであつたらう。

兵器工場では、一週間おきに夜勤があり、真夜中の十二時に昼食がでた。薄暗い中、冷たいご飯と少量のおかず、食欲が全然わかず食べられなかった。夜勤明けで家で寝ようと努力しても、昼間の雑音の中では難しく、寝ないと翌日の力を使つての機械仕事が危険とあせつた。又、家でも工場でも、何時空襲警報が鳴るかわからず、本を読みたいのに、時間も気力も無い毎日だった。

空襲の焼夷弾で電車が焼け、夜勤が終わった午前六時に疲れた体で、大雪の中、工場から二時間かけて歩いて帰宅したこともあった。兵器工場だから狙われやすく、警報が鳴って避難する途中に、目の前に焼夷弾が落とされたことも何度かあり、怖いとも思わなかったのが不思議だった。これは勇気があるのではなく、他人の、そして自分の命の尊さを忘れた恐ろしいことだったと戦後気付いた。勉強できないまま工場での勤労奉仕が続き、体の弱い友人が、疲れて工場から姿を消した。

女学校一年の時の数学の先生は、師範卒の若く美しい聡明な方で、私の数学への夢を育ててくださり、私は忽ち数学の虜となり、代数・幾何の美しさに魅了された。自分も将来こんな先生になりたいと熱望しながらも、なかなか勉強の時間が無く、それでも数学科の試験に受かり女子大生になった。

昭和二十年三月の東京大空襲で、家だけは残ったが、逆に疎開させた荷物が駅の貨車の中で焼け、家財・衣類・書籍を失った。伯父（母の兄、父は私が小学五年生の時病気で亡くなっており、伯父は父親代わりに私達を気遣ってくれていた）が岡山県の小都市の旧家で、強い勤めで岡山県に疎開した。一見のどかそうに見える田舎の生活、そこで古くからの因習に驚かされた。一例として、当時の戦時下でも、“同じ服で二日続けて表門から出ない。近所の目があるから裏門から出なさい”と言われた事である。やがて敗戦となり、伯父の長女が、広島原爆で被災した夫と戻ってきて、身边は重苦しいムードになった。

大学から、「十月末までに出席出来なければ入学を取り消す」という通知を疎開先で受け取った。伯父は、若い娘を破壊され不安定な東京に帰すことに反対したが、母は、本人が強く希望するし、女性も自立できる力を持つべきだと伯父を説得し、学校に戻る事ができた。

大学はすでに二ヶ月前から始まっており、私はその間の勉強を取り戻すのに懸命だった。焼け跡の町に古本を求めて歩いたが、欲しい専門書は無く、何度目かでやっと見つけたときは、天にも昇る心地でおし頂いた。貴重な書籍の多くが戦災で灰燼に帰したことは、本当に大きな文化的損失であった。

戦後、新刊書を最初に手に入れたのは、“ホグベンの百万人の数学”上下二冊の翻訳書であった。白い紙とは言い難いわら半紙で、各七五〇ページを超える存在感のある本で、何度も何度も撫でて、机に飾り喜んだものだ。昭和二十一年六月発行で一冊二十八円。結婚、家の建築、最建築と六十年が過ぎたが、入手した時の感激が忘れられず、今でも本箱に飾り、濃茶に変色した本を時に眺め、旧友に会った気分である。

この下巻の“あとがき”に、「上巻が訳出されてから僅かな時日であるにも拘らず、本書が大衆の間にゆきわたった有様は、洵に驚くべきものがあります。乾いた土が忽ちにして雨を吸ひ込むのにも譬へてよいでせうか。思ふに本書の如き、数学の内容にまでも入りこんだ高級な通俗書を読むべき地盤は、既に出出来上がっていないながら、それに応ずるものが現はれなかったといふのがわが国の状態だったのです。以下略」…とあるように、本当に私たちは書物に飢え、求めていたのです。人々が灰燼の中から何とか立ち上がり、生きることに精一杯だったのに、多くの人が乏しい資金の中から書物を購入していたということは、日本の為にも素晴らしい事であった。

昔の努力で日本は立ち直り、今日に至った。戦争に加担しない六十年は真に貴重であった。これからも日本国憲法第九条の“戦争の永久放棄”を尊重し、世界の範となることを心から希望する。